

第二十五回

白鳥省吾賞

受賞作品集

「自然」の詩

「人間愛」の詩



宮城県栗原市
栗原市教育委員会
白鳥省吾記念館

一般（高校生以上）の部

●最優秀賞

「雪虫」

大西 昭彦

●優秀賞

「波」

関根 裕治

「BAR G」

和井田勢津

●ふるさと賞

「この地に出会う」

白鳥 美咲

●審査員奨励賞

「宝石の持ち主」

内山 芽泉

「母の心、僕知らず」

瑞雲 旅人

小・中学生の部

●最優秀賞

「小さな命」

中村 咲彩

●優秀賞

「くりはらいん」

菅原 汐

「たいふういつか」

ベタのピース

●特別賞

「秋風」

菅原 瞳美

「すごいぞ ジジ集団」

金野 心南

「空蟬」

内山 和香

●審査員奨励賞

「つかれた」

宮川 千鶴

「カナカナの声に」

菅原 詩

《目次》

あいさつ	……………	栗原市長 佐藤 智	1
受賞作品			
一般（高校生以上）の部	……………		2
小・中学生の部	……………		6
審査員選評			
川中子 義勝	……………		11
原田 勇男	……………		12
佐々木 洋一	……………		13
三浦 明博	……………		14
渡辺 通子	……………		15
寄稿「第24回白鳥省吾賞を受賞して」 齋藤 茂登子	……………		16
親族あいさつ	……………	白鳥 東五	17
都道府県別応募状況	……………		17

白鳥 省吾 略歴

- 1890年 宮城県栗原郡築館村(現栗原市築館)に生まれる。
- 1913年 早稲田大学英文学科卒業。
- 1914年 第1詩集『世界の一人』を自費出版。
- 1918年 ホイットマンの研究論文・訳詩を発表。
- 1919年 『民衆』第11号に白鳥省吾詩集掲載。詩集『大地の愛』出版。
- 1921年 新潮社『日本詩人』が創刊し編集者となる。
- 1922年 北原白秋と文学論争をする。
- 1926年 「大地舎」を創設し、詩誌『地上樂園』や詩書の出版を始める。
- 1939年 大日本婦人連合会発行の月刊誌『女学生新聞』編集長となる。
- 1961年 日本農民文学会会長となる。
- 1962年 日本歌謡芸術協会会長となる。日本民謡協会より文化章受賞。
- 1965年 築館町名誉町民となる。栗原郡名誉郡民となる。日本詩人連盟会長となる。
- 1968年 勲四等瑞宝章が授与される。
- 1973年 逝去。昭和天皇より銀杯が下賜される。

あいさつ

栗原市長 佐藤 智



第二十五回白鳥省吾賞の各賞を受賞の栄に浴された皆様に、謹んでお祝いを申し上げます。

白鳥省吾賞は、郷土出身の民衆詩派詩人である白鳥省吾先生の偉業を顕彰し、市民の文化水準の向上に資することともに、多くの方に、白鳥省吾先生の取り組まれた民衆詩に触れていただくきっかけとするため、平成十一年度に創設いたしました。

二十五回目を数える今回は、全国各地から一般の部に七百七十三編、小・中学生の部に四百九十三編、合計で千二百六十六編の作品が寄せられました。あらためて、ご応募いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

白鳥省吾先生は、故郷の山河と民衆をこよなく愛し、農民の姿や純朴な人々の生活から、深い愛郷心と農民魂をもつて民衆詩を詠いあげ、口語自由詩の発展に

多くの偉業を残した民衆詩派の代表的詩人であります。

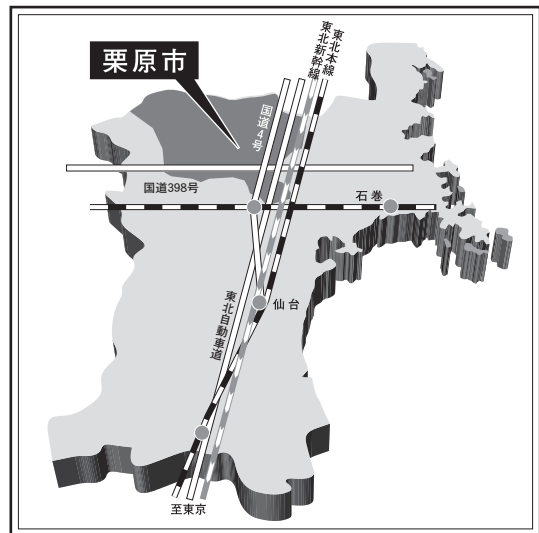
この白鳥省吾先生の功績や足跡を後世に伝えることを目的として、平成十年七月一日に白鳥省吾記念館が開館し、今日まで多くの皆様にご来館いただいております。

この度、栗原市は、宝島社出版の『田舎暮らしの本』二〇二四年二月号「二〇二四年版 住みたい田舎ベストランキング」の「人口五万人以上一〇万人未満の市」総合部門において、全国第一位になりました。白鳥省吾賞の作品主題として「自然」と「人間愛」は、栗原市の魅力そのものであり、守るべき財産であると再認識しているところです。

今後も白鳥省吾賞をおして、多くの作品に出合えることを楽しみにするとともに、市外からご応募いただいた皆様にも、ぜひ一度この地へお運びいただけていただくことを期待しております。

結びに、審査員の皆様には、厳正な審査をしていただきましたことに感謝の意を表するとともに、白鳥省吾賞の事業実施にあたりご支援ご協力をいただきました関係各位に心から御礼を申し上げます、挨拶いたします。

宮城県栗原市



市章



デザインは、栗原市の頭文字、ひらがなの「くり」をモチーフにしたもので、シンプルにバランスよく、活力のある親しみやすい形で表現しています。

緑色は、自然たっぷりの田園都市をイメージし、中央の形は、栗原の象徴「栗駒山」と、米どころの作物「お米」を合わせて表現しています。

—平成十七年九月十五日制定—

一般(高校生以上)の部 受賞作品

最優秀賞



「雪虫」

大西 昭彦

兵庫県神戸市

潮騒ではなかつた
 老女が眠るように話している
 海ぞいの鄙びた宿
 板廊下がずんずん続いて奥は暗く
 柱は黒々おさまっていた
 りんどうの花が凜として
 もう冬も近い
 あどひと月もしたきや
 雪つこ屋根まで積もつてまつて
 こうすて雪掻きばすらんだ
 重えのなんの腰痛くなるじゃ
 老女は櫓でもこぐように
 小さなからだを伸ばしたり縮めたり
 藍色の闇に海が暮れていく
 沖をゆく船の小さな灯りもあつた
 気づけば灯りがもうひとつあらわれ

じりじり距離を縮めていく
 あの海で死んでいった男たちもいる
 そう話してくれた女たちもいた
 やがてふたつが重なり
 ゆつくりとまた離れていく
 人はだれも海峡をゆく灯火なのだ
 孤独で寂しい鬼火なのだ
 わらはんどが赤え帯すめてな
 むがしは雪んなが遊んであつた
 おめ どこからぎだんだが
 ほえ ひどりで旅すてらのだが
 その声で我に返つたものの
 どこに帰つてきたのかもわからない
 子守歌でも聞いていたのか
 老女が眠るように笑っている
 どこかで赤ん坊の泣き声がある
 ありんごか
 曇天で見たあの仄かな赤みが
 つやつやした幼い頬に重なる
 すでに海は藍を失い
 小さな灯りはもう雪虫のよう

優秀賞



「波」

関根 裕治

埼玉県上尾市

駅前通りの雑踏を歩いていた
 人混みが苦手なわたしは
 帽子を目深にかぶり
 うつむきがちの姿勢で
 若い二人連れが前を歩いていた
 男性はおろしたての白いスニーカー
 女性はフリルのついた青いスカート
 デートの最中なのだろう
 ふたり手をつなぎあつて
 ところが数十メートル歩くたびに
 なぜかふたりは手をはなすのだった
 そしてしばらくすると
 またしかと手をにぎりあう
 どういうわけだろう
 顔をあげて見てみると

ふたりは歩きながらも

ときおり上半身をたがいに向け

手話を交わしているのだった

それで彼らはしばしば

手をはなす必要があったのだ

黙っていると不安がつり

手をほどこいて会話をかわす

触れていないと寂しくなり

会話をきりあげ手をつなぐ

そのくりかえしの所作は

冬の浜辺によせてはかえす

しずかな波のようだった

ほどこころばそさと

つなぐやすらかさのたびに

彼らはことばよりたしかかな

何かを伝えあうだろう

血潮のぬくみをともなった

てのひらをつうじて

優秀賞



「BAR G」

和井田勢津

青森県八戸市

ウイスキーの瓶が三本並んでいた

何で三本もあるの？ と聞くと

飲み比べをしようと思って と言う

バーでもあるまいし と言うと

いやバーだ ジーとバーがここにいる と

私のこと初めて「バー」と呼んだね

十八だった青年と娘は出会って

地道に細胞分裂を繰り返して

バーとジーがここにいる

「BAR G」 本日開店

カウンターの内側に並んで

明日のグラスを丁寧に磨く

時々ナッツのようにことばを齧る

今夜は客もなく 二人だけ

父も祖母も さつきまでいた母も

一度外に出た人は戻ってこない

消えるのでなく移動するのだ

「BAR G」は東の間の居場所

年中無休だがいつかは閉店の時がくる

ネオンが点滅している

「BAR」の赤い灯が先か

「G」の青い灯が先か

同着ゴールの奇跡が起きるのか

もう少し持ちこたえるのか

あつ雨 雨？ 雨だよ 雨か 雨 あめ

寒い 寒いね 寒いなあ 寒いよ さむ

こんなとりとめのない 甘ったるい

言葉の綾取りを 永遠に続けたい

まだまだ まだまだまだ まだまだまだまだ

まだ 話し足りない

「BAR G」

夜が明ける頃

ウイスキーの瓶が三本空になって

私たちは重なってぶつ倒れた

ふるさと賞



「この地に出会う」

しろとり
白鳥 美咲

宮城県栗原市

堰の水はやわらかに 広き田へと流れ入り
この世に空がふたつの水鏡
望む山はなだらかに 南北に遙かにのびて
青い肌はまだらに浮かぶ白い駒
農夫婦はおだやかに 土に汚れた黒き手で
拭う額のしわの光る汗
トンネルを抜けた先 新幹線の窓に透けた
五月の風が吹く景色
見慣れたはずの故郷は
初めて出会ったような顔で挨拶をした
隔たれた年月は
わたしを異邦人に変えてしまった
この地を踏みしめるには わが身は虚しい
知らねばならぬことだらけの
真新しくなった世界のただ中で
さまよい疲れたからだで夢想する
あの山の駒に跨って 自由に空を翔けたなら
見つけることができるだろう

遠くなった土の匂いを
小さな虫たちの囁きを
古びた寺の杉の木立を
詠りのあるおしゃべりを
浩々とした田畑の緑を
寂れた街の暖かな灯を
微々たる生のひと欠片を
人と自然のありのままを
わたしのからだに余る全てを
駒の雪のからだにいつばいに詰め込んで
見過ごさないように 忘れぬように
そびえる山に飾りつけよう
見上げればいつでもそこにあつてほしい
それが世界との繋がりと信じたい
疲れたからだを起こして夢想する
五月の風に吹かれた 清々しい心のままで
置き去りにした美しさと感情に
再びめぐり合うために
白い駒に跨って この地の空を翔けぬける

審査員奨励賞

「宝石の持ち主」

うちやま
内山 芽泉

愛知県岡崎市

雨戸を閉めようと手を伸ばした先に君は居た
思わず声が漏れてしまう
ああ、今年もやられた
毎年必ずこの雨戸にやってくる
驚かしてやろうと言わんばかりだ
一歩間違えば即死 君は命知らずな奴
飛ぶことを知らずに死んだら
どんなに心残りになるか考えてごらんよ
いつからか我が家には
夏の雨戸注意事項がある
それが君の命を救った
べちゃんこの君なんて見たくない
そんなことお構いなしに羽化する君は
きつと歴代の雨戸好きと
同じ遣伝子を持つている
緑の木々を無視して
無機質な雨戸が好きなんておかしな奴
君の背中がうごめいて

私の背中にも何かが生えそう

ぞくぞくが止まらない

けれど虫嫌いを魅了する

柔らかな透明感のある羽はオパールのように

夜が宝石を隠し君を守り黒くしてゆく

暑い日差しが旅立ちを用意しているのに

君は飛び立とうとはしない

身支度の遅い私みたい

君色自転車に乗り登校だと思っ私は

君に侵食されている

夕焼けに染まる抜け殻は

ぼつかりと穴が空いている

恐る恐る手を伸ばし触れてみる

しっかりと細い爪が食い込んでいる感触

背中が再びぞくぞくして君を体感したみたい

悶絶して座り込む

虫嫌いの克服は険しい

君の柔らかな羽の色だけが好き

驚かす蝉は嫌い

夏は始まったばかり

今日もまた恐る恐る雨戸を閉める私がいる

審査員奨励賞

「母の心、僕知らず」

瑞雲ずいうん 旅人たびびと

愛知県岡崎市

俺、今日の走りは完璧だったわ

そう、そういう時こそ気を引き締めないで

母が言う、お決まりのセリフ

母はなかなか褒めない

僕は褒められて伸びるタイプなのに

優勝したぜ、やった

おめでと、そういう日こそまずストレッチ

いやいやここは飛び上がって喜ぶ場面でしょ

祝賀パーティー拓いてもいいくらいでしょ

なんだ、そのつまらない反応は

タイムが全然上がらないんだ

俺、陸上は向いてないのかな

……。

おいおいおい無言ですか

こういう時は甘えるなって叱るとか

そんな時もあるってなぐさめるとか

そういうのを待ってるんですが

僕の母は喜ばない母

波のない海のように冷静なハートの持ち主

先日のレースで記録係の母がカメラを忘れた

代わりに父が撮ってくれた僕の動画

大きな太い声で頑張れと叫ぶ声が聞こえる

ゴールが近づくとつれその声は絶叫に変わる

頑張れっ行けっ

やったよやったよ

誰よりも大きなその声はまぎれもなく母の声

お前の調子のいい時も悪い時も

いつも変わらずにしようと

いつもの気持ちで、いつもの調子で

お前がレースに臨めるようにと

なるべく冷静でいようとしてるんだよ

あれでもね、苦笑する父

僕の母は喜ばない母

ここで訂正

すごく喜んでるけれど

冷静を装っている僕の母

冷静を装っている僕の母

小・中学生の部 受賞作品

最優秀賞



「小さな命」
なかむら 中村 咲彩
宮城県栗原市立
築館小学校六年

つばめ

我が家につばめがやって来た

迷信 空から幸せがふってきたんだ

ふと気持ちが豊かになった

すごい光景を見た

つばめたちが電線の上で会話をしている

またたくまに巣が完成した

卵を発見した 一日一個 四個になった

神秘的だった 自然となみだがこぼれた

ここに四羽の命を預った

親つばめが夜通し卵を見守っている

感動とこうふんで会いたさがつのる

卵がわれひなが誕生する

四羽の命に出会えた

四羽全員につんちゃんと言付けた

口を大きくあけてえさをまつつんちゃん

たまらなくかわいい

せつせとえさを運んでくる親つばめ

カラスから守らなきゃ

暑さからも守らなきゃ

なにもしてあげられない私がいる

「つんちゃん頑張れ！」

心でさげぶ

すごい生命力

とてつもなくはやい成長

まるで玉手箱を開けたみたいだ

つんちゃん達が飛ぶ練習を始めた

いなくなるのをさつした

「いなくなるしないで！」

心がさげぶ

つんちゃん達がどこにもいない

飛び立ったんだ

また会えると信じてるよ

優秀賞



「くりはらいん」
すがわら 菅原 汐
宮城県栗原市立
栗原西中学校一年

方言は分かりにくい

同じ土地に住んでいるのに不明な会話も少くない

学校で使うことはまずない

何より訛りは恥ずかしいだろう 使えるはずがない

あちらこちらで頭の上を飛び交う

ごさいん やすまいん

あがらいん ねまらいん

あがいん のまいん

ラップのような だじゃれのような

実はこれが本当の韻を踏むということではないのか？

そんな馬鹿なことを考えてみる

まだありそう

「のって みらいん くりでんさ」

「のぼって みらいん 栗駒山さ」

「いって みらいん ジオパークさ」

みらいん みらいん 未来 ライン

栗原の 未来へ続くライン（線） なぁんて

かつこいいじゃない

そんな馬鹿なことを考えてみる

「くりはらいん」

勝手に名前をつけてみる

「きてみらいん くりはらいん」

一人大声で言ってみる

「おしよすい」 けど悪くない

優秀賞

「たいふういつか」

ベタのピース

台風がやってきた。

ぼくは「台風一過」のことを「台風一家」と
ずっと勘違いしていた。

でも、今でも台風の際には台風一家がびゅー
んとやって来るような気がする。

お父さん台風、お母さん台風、そして子供の
台風だ。

台風一家はびゅーびゅー音をたててやって来
る。

もうすぐ日本に上陸だ。どこらへんに上陸し
ようかなあ。それとも縦断か。そんなことを
相談している。

今は真つ青な空だけれども、もうすぐ台風一
家がやって来て大暴れする。

お父さん台風がいつばい雨も降らせると、お
母さん台風がおなかからいつばいの風を吹き
出す。こどもたちはそれをおもしろがってぶ
んぶんと廻りだす。今にも空が真つ暗だ。

人間たちは大忙しだ。風に屋根を吹き飛ばさ

れないように、庭の自転車や鉢植えが倒れな
いようにいつばいひもでくくっている。準備
は万端だ。

びゅーん、びゅーん、びゅわーん。ごごー、
ごごー、ごごー。台風一家はひとしきり大暴
れすると、お父さん台風が「よし、これくら
いにしとこうか」とお母さん台風に尋ねる。

お母さん台風は「そうね、これくらいにして
おきましょう」と子供たちを眺める。子供の
台風は「おなががすいたよ。お母さん」と言
い出した。

台風一家が通り過ぎるとそこにはまた大きな
青空だ。真つ青な空が返ってきた。

きつと台風一家の置き土産なんだろう。ぼく
はずつとこの話を信じていた。そしてみんな
には内緒だけれども今でも台風が近づいてく
ると台風一家は何を話し合ってるんだろうと
考えてしまうのだ。 おわり

特別賞



「秋風」

菅原 瞳美

宮城県栗原市立
築館中学校三年

どこからともなくやってくる

開けた窓から

早朝の空気とともに

部屋をめちやくちやにして

去ってゆく

どこからともなくやってくる

きれいな一つ結びの髪も

クリーニングに出したばかりの冬服も

台無しにして

去ってゆく

どこからともなくやってくる

固く 握りしめた通信簿が

生きてるように宙を舞う

出来の悪い成績を

はためかせて

去ってゆく

どこからともなくやってくる

あなたのせいだ

すべてが鬱陶しく感じるよ

空中を睨みつけても

他人事のように

去ってゆく

どこからともなくやってきた

わたしとあなたは正反対

後ろを向いて戸惑いながら進むより

前にしか突き進まない

あなたのようになってみたい

背後から

頬をさすって

秋晴れの空に

きえてった

特別賞

「すずいぞ ジジ集団」

金野 心南

宮城県栗原市立
若柳小学校五年

向こうから軽トラックが次々とやって来る

一台、二台、三台・・・

まだまだ軽トラックの列が続く

トラックから次々とジジ達がおりて来た

麦わらぼう子やふ通のぼう子、タオルを頭に

まいたジジ達何か始まるだろう

ヴォン ヴォン ウォン

ウィーン ウィーン ウィーン

バリバリバリバリ

ダダダダダダ

ジジ集団の草かり作業が始まった

たくさん草の音かき機械の音が家の中まで聞こえて来る

外のセミの鳴き声も、家のテレビの音もかき

消すほどの大音量

見ると あつちからも こつちからも

草をかっていく

ジジ集団の前に伸びた草が次々とたおれて行く

バタ バタ バタ

あつという間に草がかられてしまった

まるで、角さとうに角が集まったかのよう

だ

いつきに草をかっていく

そしてかり終ると次の場所に行くのか？

ジジ集団がい動する

軽トラックの大きい動

麦わらぼう子の ジジ集団

プロの草かり ジジ集団

暑さに負けない ジジ集団

ジジ達ってすごいんだ

特別賞

「空蟬」

愛知県岡崎市立

内山 うちやま 和香 にこ
竜海中学校一年

何者かが誕生する時は

こんなにもグロテスクなのだろうか

ターミネーターの効果音が

私の頭に鳴り響く

もしかしたら私の誕生も

そうだったのかも知れない

たわいのないことが頭の中で行ったり来たり

そうでもしないと

私の背中からも産まれそう

使ったことがないけれど神秘的

多分そう

使うとするならこの瞬間 とき

生命の誕生は神秘的

ふと重なって心が温かくなる

私が産まれる時

父は庭の草取りをしていたらしい

聞いた時は意味が分からなかった

けれど今

少し理解した気がする

居ても立つても居られない

そんな気持ちだったのか

父の頭の中は

きつとまだ見ぬ私のことで一杯だったはず

いつか聞いてやろう

今は恥ずかしくて聞けそうにない

その日が来るまで

空蟬にしまっておこう

答え合わせはもう少し先で大丈夫

今日という日

無心に草取りをしていた庭に命が生まれた日

そして

父の思いに私が触れた日

審査員奨励賞

「つかれた」

宮川 みやがわ 千鶴 ちづる
香川県三豊市観音寺市
学校組合立三豊中学校二年

一、二時間目

テスト二日目くたくたで

異国の言語と細胞を相手にした後

つかれきる

三時間目

社会のテストが返された

ほぼノー勉でいどんで高得点、意外すぎて

つかれきる

四時間目

体育だったが保健になり

眠気との戦い

つかれきる

そして今の五時間目

人間愛が難しすぎて

つかれきる

詩の賞金にさわぐクラスメート

うるさいと思いつつ

思いうかべるのはいつも一しよにさわぐ

友達たち

いっしょにわらい

さわぎ

ふざけあう

これは人間愛なのか

よく分からないが

口角上がる

口元かくす

審査員奨励賞



「カナカナの声に」

菅原 すがわら 詩 うた

宮城県栗原市立

栗原西中学校三年

一日の終わりを告げるかのように、カナカナの声が一斉に鳴り響く
物憂げに聞こえるその声は、過去の記憶を現在にシンクロナイズさせる

あの日地下七千メートルから解放された膨大なエネルギーは
大地を震わせ、抗うことのできない圧倒的な自然の力を見せ付けた

五年前の暑かった日、初めて目にした巨大な爪痕の痛々しさと放出されたエネルギーの凄まじさ
深緑の中に浮かぶ土気色とカナカナの声

その日以来、カナカナの声を耳にすると、繰り返し呼び起こされるのが
海の青でも向日葵の黄色でもなく、山肌がむき出しの「あの光景」となった

時間の流れは、人々から記憶を奪っていく
大地震、大雨、猛暑、切れ目のない災害に、
「あの光景」は
東北の片田舎で起こった小さな事と片付けられてはいないだろうか
犠牲の大小に忘却が比例してしまっていないだろうか

根を下ろした小さな種は、十五重の年輪を数えるまでに成長した
やがては森となり、いつしか痛々しい爪痕も瘡蓋で覆われるかのように分からなくなるだろう

その時我々は何を思うのか
絶えず躍動し続ける相手に、記憶を奪われ続けた我々は対峙できるのか
今年もカナカナの声が聞こえてくる

私は「あの光景」が頭から離れないでいる

第二十五回白鳥省吾賞審査員選評

大切な経験を自身の言葉で

彫琢する



川中子 義 勝

最終選考に残った作品には優れたものが多かった。身近な一つの出来事・経験を自身の言葉に留めようとする意図がよく感じられた。最優秀賞の大西昭彦さん「雪虫」は、その段階をさらに越え、目のあたりにする複数の対象を見事にまとめている。旅の宿の一場面を情景として描きだす力量は群を抜いている。色彩や人物の対比（闇と雪・灯、老女と赤ん坊）で場面がくつきり浮かび上がり、引用される老女の訛りが現実味を深めている。

優秀賞のお二人は、初めに述べたように、自ら経験した一つの出来事を独自の観点で表現しようとする。関根裕治さんの「波」は、前を歩く二人が手を繋いだり離したりする姿を訝しむところから出発し、注意深く観察し、納得する。二人の仕草と心の姿を寄せては返す波と受けとめた時に詩が成った。和井田勢津さんの「BAR G」は、「婆爺」の連想から一見常軌を逸した場面を描いている。しかし、老いの現実を諧謔をもって語り出すユーモアと、生

死の時をともにしたいと願う真摯が読者の心を捉える。

ふるさと賞、白鳥美咲さんの「この地に出会う」は、帰郷の主題を扱う。故郷を美しく想う心と、出自に立ち返りたいという願いを生き活きとした風土の描写を重ねて描く。曾根美代子さんも、栗原で生きてきた日々と将来を望む素朴な語りが好ましかった。審査員奨励賞のお二人の場合も、自身の経験を物語るそれぞれの言葉に、若々しい可能性が窺われた。内山芽泉さんの「宝石の持ち主」からは、蟬の姿に自分の在り方を重ねつつ、小さな命を思いやる優しい心が浮かび上がる。瑞雲旅人さんの「母の心、僕知らず」は、振る舞いからは分らなかった母の思いを知った感動を素直に語る。いずれも自らの経験をそれぞれの言葉で彫琢しようとしている。この観点からは、太田ユミ子、メンデルソン三保、天下井恵、白鳥光代、おぐりあつこ、この方々の作品にも惹かれるものがあつた。

かわなこ
川中子 義 勝

プロフィール

元日本詩人クラブ会長、日本現代詩人会会員、日本文藝家協会会員、東京大学名誉教授
埼玉県さいたま市在住

略歴

東京大学修士課程修了。「詩は人類の母語」と唱え、ゲーテやロマン主義に多大な影響を与えたJ・G・ハーマンの研究で、1998年（平成10年）アマリーエ・フォン・ガリツイン賞受賞（ドイツ）。2010年（平成22年）日本詩人クラブ詩界賞、2016年（平成28年）秋谷豊・詩鳩賞、2017年（平成29年）第23回埼玉詩人賞受賞。日本詩人クラブ新人賞、同詩界賞選考委員などを重ね、第34回現代詩人賞選考委員長。日本現代詩歌文学館振興会評議員。詩誌「ERA」「嶺」を編集・発行。月刊誌「詩と思想」編集長。

著書

詩集「眩しい光」「ものみな声を」「ときの薫りに」「遙かな掌の記憶」「廻るときを」「魚の影鳥の影」「ふたつの世界」など。詩絵本・エッセイ「ふゆごもり」「ミンナと人形遣い」「散策の小径」、評論「詩人イエス・ドイッ文学から見た聖書詩学・序説」、「詩学講義」、共著「詩学入門」、翻訳「北方の博士・ハーマン著作選」「神への問いードイッ詩における神義論的問いの由来と行方」など。

個性的な作品群



原田勇男

傑出した作品には出会えなかったが、入賞した詩はそれぞれ個性的で読み応えがあった。大西昭彦さんの「雪虫」は、海ぞいのひなびた宿で老女の方言を聞きながら、北の海を見ている。「人はだれでも海峡をゆく灯火なのだ／孤独で寂しい鬼火なのだ」という二行の詩句に惹かれた。

関根裕治さんの「波」は感動的な作品である。前を歩く若い二人連れが数十メートル歩くとたびに、なぜか手をはなす。しばらくすると手をにぎりあう。よく見ると、ふたりは歩きながら上半身を互いに向け手話を交わしていた。手をほどこいて会話をかわしました手をつなぐ。しずかな波のように。心に残る詩だ。

和井田勢津さんの「BAR G」は、ジーとバーが二人いて酒を飲んでいいるから「BAR G」だという発想から詩が生まれた。十八歳だった青年と娘が出会って、さまざまな人生の局面を生きてきた。さりげなく書いているが、人生の年輪を感じさせる作品だ。

白鳥美咲さんの「この地に出会う」は一読してさわやかな印象を受けた。故郷を離れていた

が、再び故郷に戻って、その豊かな自然と土の匂いの中で働らく人びとの姿に打たれ、この地で生きて行こうと決意する心が素直に表現されている。

内山芽泉さんの「宝石の持ち主」は、虫嫌いなのに、オパールのような羽を持った虫に魅せられた思いをみずみずしく描いている。微妙な感性の揺らめきが素敵で、審査員奨励賞に推した。今後も豊かな観察眼と感受性を生かして詩を書いてほしい。

瑞雲旅人さんの「母の心、僕知らず」は、陸上競技に打ち込む学生とそれを見守る母親の反応とのギャップを書いた。喜ばない母は実にごく喜んでいるのに、冷静を装っているというオチが効いている。

原田勇男

プロフィール

日本現代詩人会会員、日本文藝家協会会員、日本詩歌文学館振興会評議員、宮城県詩人会顧問
宮城県仙台市在住

略歴

東京生まれ。岩手県松尾村（現八幡平市松尾）で育つ。盛岡工業高卒。早稲田大学在学中の二十歳から詩を書き始め、初期の「現代詩手帖」に投稿。詩誌「コルサル」「エスプリ」「現代詩手帖」などに詩を発表。1968年（昭和43年）、東京から仙台へ移住。1987年（昭和62年）度宮城県芸術選奨、2008年（平成20年）度宮城県教育文化功労者表彰。第50回H氏賞選考委員、第30回現代詩人賞選考委員長、2006年（平成18年）より宮城県高等学校文芸コンクール詩部門審査委員長。

著書

詩集「北の旅」「炎の樹」「火の奥」「サード」、詩画集「夢の漂流物」（画・上野憲男）、詩集「エリック・サティの午後」「水惑星の北半球のまちで」「何億光年の彼方から」「炎の樹連禱」「かけがえのない魂の声を」、評論集「東日本大震災以後の海辺を歩く―みちのくからの声」、現代詩文庫234「原田勇男詩集」（思潮社）など。

様々な愛情のありようを

感じた



佐々木 洋 一

一般の部の最終審査は、応募数七百七十三編の作品から第一次審査を通過した四十六編を対象にしました。

今回は、震災やコロナ禍を経て、普段が戻ってきたのではないか。そう感じるほのぼのとした作品が多くありました。中には、新たな戦禍を危惧するものやジェンダーに関するものなど、今日的な題材の作品も何編かありましたが、本賞のテーマである「自然」「人間愛」に相応しい作品が揃ったように思いました。

最優秀賞の大西昭彦「雪虫」は、老女との会話などを通じて知った、海で生きる人々の厳しさや死を、誰もが抱える孤独で寂しい鬼火とみに、赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。そこには生の小さな輝き。少し感傷的であるが、方言の挿入、海辺の情景や心情の表わし方など、とても巧みである。優秀賞の関根裕治「波」は、歩いては立ち止まり、手話を交わす恋人同士に、言葉ではなく、手のひらの血潮で伝え合う愛情の真を見据える。同じく優秀賞の和井田勢津の「BAR G」とは、婆と爺のこと。「時々ナ

ッツのようにことばを齧り」まだまだと酒と言葉を交わす。老いを感じる歳となった夫婦のさりげない愛情を表現。ただ、「二人でウイスキー三本空」は飲み過ぎか。ふるさと賞の白鳥美咲「この地に出会う」は、自分の中で失われてしまったふるさととの再びの出会い。そこにはかつての自分と変わらぬ自然の姿が今も在る。作者の心の高揚が清々しい抒情と重なる。奨励賞は、昨年、小・中学生の部奨励賞を受けた内山芽泉「宝石の持ち主」。雨戸の虫という、普段は気付かない対象をしつかりと捉え、確かな筆力を感じる。瑞雲旅人「母の心、僕知らず」は、目のつけどころが面白く、母からのユーモア溢れる愛情をしつかり受け止めている。

佐々木 洋 一

プロフィール

日本現代詩人会会員、日本詩人クラブ会員、詩人会議運営委員、日本現代詩歌文学館振興会評議員、日本文藝家協会会員、宮城県詩人会会長
宮城県栗原市在住

略歴

宮城県栗原郡栗駒町（現在の栗原市栗駒）生まれ。1981年（昭和56年）、詩集「星々」により第20回晩翠賞を受賞。1998年（平成10年）度宮城県芸術選奨を受賞。1999年（平成11年）、詩集「キムラ」により第27回壺井繁治賞受賞。第1回モテラート賞受賞。第51回・第64回日氏賞選考委員。晩翠わかば賞・あおば賞選考委員。第41回から50回壺井繁治賞選考委員。第37回現代詩人賞選考委員。

著書

詩集「未来サヤンカの村」「うれうれうぐらす小人」「星々」、新鋭詩人シリーズ「佐々木洋一詩集」、詩集「01」、詩選集「佐々木洋一詩集」、詩集「アイヤヤチャア」「キムラ」「ここ、あそこ」、「でんげん」、日本現代詩文庫「佐々木洋一詩集」、現代詩の10人「アンソロジー 佐々木洋一」など。

熱血、新鮮、そして笑い



三浦明博

最優秀賞・中村咲彩さん「小さな命」は、家に巣を作ったつばめの様子を、ていねいに観察しつつ応援している詩。文章からあふれ出る熱血応援ぶりに、「つんちゃん」たちが来年も訪れてくれることを願うばかりである。優秀賞・菅原汐さん「くりはらいん」は「みらいん」「あがらいん」等、地元方言ならではのいくつかの語尾の特徴を捉え、くりはらいんという言葉にまとめたところがうまかった。優秀賞・ベタのピースさん「たいふういつか」は、台風一過を台風一家に置き替えた点が面白くて、想像で見立てた家族の会話部分も笑えたり楽しかった。

特別賞・菅原瞳美さん「秋風」は、中学三年生という年頃の気持ちや感情の揺れを、吹きすさざる秋風に例えてうまく表現していた。特別賞・金野心南さん「すごいぞ ジジ集団」は、軽トラで突然やって来て、すごい勢いで雑草を刈りまくって去ってゆくジジ集団に対する、驚きと尊敬が感じられた。特別賞・内山和香さん「空蟬」は蟬の脱皮をよく見て書いた詩だが、きれいなだけでなくホラーのように感じるなど、新たな視点が新鮮だった。

審査員奨励賞・宮川千鶴さん「つかれた」は

個人的にお気に入りの一編で、独特の文章とリズム感が心地よく、口角上がる、口元隠すというラストで締めたのが巧み。審査員奨励賞・菅原詩さん「カナカナの声に」は、岩手・宮城内陸地震で発生した地滑りを見た際の衝撃を描いていて、ともすれば忘れがちになっていることを戒められている思いがした。

文章を書くとき自分で気をつけていることの一つに「笑いの要素」がある。読み手を泣かせること以上に、笑わせることは難しいからだ。小中学生の人たちなら、なおさらだと思うが、今回もクスッと笑わせられた詩が何編かあった。皆さんの飾り気のない言葉で、この世知辛いや時代を生きる大人たちの、眉間のシワをのばしてほしいと願っている。

三浦明博

プロフィール

小説家、コピーライター、日本推理作家協会会員
宮城県仙台市在住

略歴

宮城県栗原郡築館町（現在の栗原市築館）生まれ。明治大学商学部卒業。仙台市でコピーライターとして2つの広告制作会社を経た後、1989年（平成元年）に独立し、現在までフリーコピーライター。2000年（平成12年）にリンククエスト・ジャパン学際部門で、小学生向けのインターネット環境教育ソフト「ふしぎのとびら」によりプラチナ賞を団体受賞。同年に第46回江戸川乱歩賞最終候補。2002年（平成14年）に第48回江戸川乱歩賞受賞。2011年（平成23年）度宮城県芸術選奨（文芸部門）受賞。

著書

「滅びのモノクローム」「死水」「乱歩作家の謎」「サーカス市場」「畏釣師トラップーズ」「コフレモノ」「失われた季節に」「感染公告」「黄金魚」「盗作の報酬」「五郎丸の生涯」「ゴッド・スパイダー」「集団探偵」「逝きたいなピンピンコロリで明日以降」など。

向上の一途



渡辺通子

第二十五回を迎える今回は、全国の小中学生から四百九十三編の応募があった。そのうち第一次審査で二十二編を選出した。年々、応募作品は全体的に向上しており選考は難航した。コナナ禍を経て、子ども達の自然や人間存在のところが詩にする愛の形や自然のとらえ方は新鮮であり、そして複雑で深いものがある。選考の基準は、作者の発見や主張があり、一語一語を選んで詩の言葉として表現豊かであることに置いた。

最優秀賞の中村咲彩さん「小さな命」は飛来した燕が営巣し、子育てを経て、やがて帰燕となっていく過程をとらえた詩。自然界の小さな生き物の家族の観察を通して生命への愛おしさを表現する。

優秀賞の菅原汐さん「くりはらいん」は方言を取り上げた詩である。リズムミカルな表現で、方言を使う人々への愛情を詠んだ。ことばの持つ不思議に迫り、故郷への愛を詩にした普遍性のある作品である。同ベタのピースさんの「たいふういつか」は同音異義語の妙をモチーフに

擬人化による家族愛を詩にした。

特別賞の菅原瞳美さん「秋風」は、秋風に仮託して自己の内面を詩にすることで独自の世界観を描いた。同金野心南さん「すごいぞ ジジ集団」は、異世代の集団による除草作業の様子をとらえたもの。同内山和香さん「空蝉」は、眼前で繰り広げられる蝉の誕生に、自身の誕生の時を交差させることで、若き日の父と母へ思いを馳せた作品。

審査員奨励賞の宮川千鶴さん「つかれた」は、学校生活の一日の倦怠をつづる。同菅原詩さん「カナカナの声に」は、近頃頻繁に起こる自然災害を題材とした詩である。忘れがたい、心に焼き付いた「光景」が残した傷跡に鋭く迫る。

その他、選外ではあったが、水谷美伶さん「嘘つきの優しさ」の繊細な感情表現、川崎紘正さん「珀玖へ」の新しい家族のあり方を思わせる中学生おじさんのおふれる愛情を表現した作品にも惹かれた。

わたなべみちこ
渡辺通子

プロフィール

東北学院大学教授、日本教育学会会員、俳人「ほの会」代表、俳人協会会員、国際俳句交流協会会員

宮城県仙台市在住

略歴

茨城県日立市生まれ。早稲田大学院教育学研究科後期博士課程満期退学、公立高等学校教諭、茨城大学（非常勤）を経て2009年（平成21年）4月東北学院大学准教授、現在に至る。

著書

「未来都市」「鴻志」「言葉の力―東日本大震災に捧ぐ追悼の詩」「新現代俳句最前線」「花美術館松尾芭蕉」56号監修など。

寄稿

第二十四回白鳥省吾賞を

受賞して

齋藤 茂登子

受賞通知をいただいた時、目の前に懐かしい風景が浮かびました。旧栗原郡若柳町の迫川土手から眺めた春、残雪駒形の栗駒山。町を南北に分け流れる迫川の冬、白鳥がゆつたりと泳ぐ。全身痛の難病を患い、二十余年。身体障害にもなりました。通院以外の外出はほとんどない暮らしです。

平成三十年に、二十日違いで亡くなった両親の葬儀にも行けませんでした。盛岡から新幹線に乗れば、くりこま高原駅は遠い場所ではないのに、墓参も叶いません。

私にとつての故郷は、あまりにも遠く、せつないところです。だからこそ、故郷は愛おしく美しくあります。

それはきつと、白鳥省吾先生も同じ

だと思えます。時代が変わろうと、その土地に宿る気質魂は同じ光を放ち続けますから。

白鳥省吾賞創設を知り、応募したいと思いつつながら、ひと文字も詩の言葉が出てきませんでした。いつか……と、年月が経ちました。

ふと、ある日。

母校若柳中学校校歌。今でも、日に一回歌っています。中学入学以来、ほぼ毎日。『豊かの栄え』で始まる、白鳥先生の歌詞です。

気づきました。

私は日本一、白鳥先生の言葉を歌っている。

最優秀賞に選んでいただいた『うたう』は、白鳥先生の言葉を長年歌い続けてきた土壌で描いた故郷です。

選考先生方々は、懐愁の想いを掬い取り、詩として読んでくださったのだと、感謝申し上げます。小さな日常の私を見つけていただき、本当にありが

とうございます。

末筆ながら、栗原市益々のご発展と、市民皆さまのご多幸を、盛岡の地より祈っております。

(第二十四回白鳥省吾賞

一般の部 最優秀賞受賞者)



親族あいさつ

「白鳥省吾賞」は、白鳥省吾記念館が開館した翌年、平成十一年に創設され、今年で第二十五回を迎えることができました。これもひとえに市長をはじめとする市関係者、審査員の先生方、その他多くの方々の熱意とご努力によるものと親族一同感謝しております。「継続は力なり」と申しますが、今回も全国各地から多数の応募作品を頂き、ありがたく思っております。

従来、日本の詩は和歌、俳句を体系とする定形型の短詩型による抒情詩や難解な言葉をちりばめた詩がよいものとされてきました。しかし、父白鳥省吾は「詩は特別な文学形態でも無く、一部の人々の物でもなく、人々の日常生活における心の表現を言葉にするものであり、それ自体、社会性を持つものでなければならぬ」と主張し、民衆詩派の詩人として「誰でも作れる口語による自由詩」の普及に力を注ぎました。この父の考えに影響を与えたのが、米国の国民的詩人ウォルト・ホイットマンでした。ホイットマンは自由、平等、友愛の精神に基づいて、誰もが分かる平易な言葉で人間、平和、世界、自然をありのままに表現し、彼の詩集「草の葉」は現在でもあらゆる階層のアメリカ人の心の支えとして愛読されています。

入選された作品はいずれもご自分の考えや経験、想像力を豊かに表現されておりました。今後「日ごろ使っている平易な言葉」で、人々に共感と感動を与えて頂きたいと思っております。この賞の益々のご発展をお祈りすると同時に、今回入賞された方々のさらなるご精進をご期待申し上げます。

白鳥 東五

白鳥省吾氏御令息

東京都世田谷区在住

都道府県別応募状況

応募総数一、二六六編

● 一般（高校生以上）の部

七七三編

● 小・中学生の部

四九三編

都道府県	一般	小・中学生	合計	都道府県	一般	小・中学生	合計		
北海道	25	0	25	近畿	三重	9	0	9	
東北	青森	15	0		15	滋賀	7	0	7
	岩手	9	0		9	京都	29	6	35
	宮城	90	305		395	大阪	25	49	74
	栗原市	15	296		311	兵庫	30	19	49
	秋田	1	0		1	奈良	10	0	10
	山形	9	0		9	和歌山	2	0	2
福島	11	0	11	小計	112	74	186		
小計	135	305	440	中国	鳥取	4	0	4	
関東	茨城	16	1		17	島根	3	0	3
	栃木	9	0		9	岡山	8	0	8
	群馬	10	0		10	広島	10	2	12
	埼玉	41	0	41	山口	10	0	10	
	千葉	32	1	33	小計	35	2	37	
	東京	113	1	114	四国	徳島	3	2	5
神奈川	43	3	46	香川		3	88	91	
小計	264	6	270	愛媛		5	0	5	
				高知		0	0	0	
北陸・中部	新潟	9	0	9	小計	11	90	101	
	富山	3	0	3	九州・沖縄	福岡	20	4	24
	石川	11	0	11		佐賀	5	0	5
	福井	5	0	5		長崎	0	0	0
	山梨	3	0	3		熊本	14	0	14
	長野	7	0	7		大分	7	0	7
	岐阜	12	0	12		宮崎	3	0	3
	静岡	18	1	19		鹿児島	7	0	7
愛知	50	11	61	沖縄		11	0	11	
小計	118	12	130	小計	67	4	71		
海外	6	0	6	合計	773	493	1,266		

白鳥省吾記念館

栗原市公式ウェブサイト <https://www.kuriharacity.jp>



白鳥省吾記念館
ウェブサイト



栗原市立図書館
白鳥省吾記念館
Facebookページ



正面入口



常設展示室

〒987-2252
宮城県栗原市築館薬師三丁目3番26号
TEL 0228-23-7967 FAX 0228-21-1404

【入館料】

一般 210円 (団体の場合は一人170円)
小中高校生 110円 (団体の場合は一人 90円)
※団体は、20名以上の場合。

【開館時間】

午前9時から午後4時30分まで

【休館日】

毎週月曜日
国民の祝日(祝日が月曜日の場合は翌日も休館)
年末年始(12月29日から翌年1月3日まで)
特別整理期間

令和6年(2024年)2月発行
白鳥省吾記念館 編集・発行